

五月に思う

清水 光子



倉橋惣三先生の『育ての心』の「五月」「何と
いうすばらしい生育の力であろう。」にはじまっ
て「子どもらの活力の伸長……毎日その中に俱に
居ながらも、日々に新しい目をみはらせられる
ことばかりである。」「伸ばそうとするばかりでな
く、伸びるのを待っているばかりでなく、現に目
の前に斯うまで伸びゆくのを驚く心。——それが
五月の心であり、また教育の心でもある。」つづ

いて「五月の日光」に「盛りあがる土のいのちに
晴々と笑みかけて、一切の生育を思いのままに遂
げさせているものは、五月の日光である。（中略）
強いて育てるのでもない。激しく励ますのでもな
い。ただ自らわだかまりなき明朗さにおいて、育つ
ものを育てさせているのが五月の日光である。」と
讚え、結ばれている。この祈りにも似た詩のよう
な『育ての心』を書かれた時から半世紀以上経っ

ている。

人間の生活の便利、利益のみを追及した科学技術の発達進歩のめざましさが社会環境を、更に自然破壊という形で、自然環境までも変えている。

このアンバランスというか、矛盾だらけな今、私たち大人は受けついできたDNAに刻みこまれた能力のよきものを更によく、發揮できるように、次の世代に伝えていかねばならないと思う。宇宙旅行が気軽にできる、海底にユートピア都市をつくる、このような夢を抱くのも結構。でも私はずっと身近な、或いは地球のそここの隅に生きる稚い命の今を明日を考える。教育要領のことがどう変わろうと次々に新しい情報処理等の機器が出てこようと不変な願い、祈りを思う。

みどりの日の前に朝顔の種子を蒔いた。銘々一鉢に三粒ずつ。名札をつけた。連休中は宿直の人に水やりをたのんだ。連休明けの日母親の傍から又離れがたくなったAくんも、友だちの声に誘わ

れて庭に自分の植木鉢を見に出てきた。何と、つややかな双葉が出ているではないか。Yちゃんのも、K君のも少しずつ大きき、色がちがいがら出ている。一しょになって喜ぶ。が一方になぜかまだ土のふくらみさえみえない鉢を抱えこんでしょんぼりいるIちゃん、M君がいる。「大丈夫、きみのはちよっとお寝坊なのかもね。目を醒ましたら元氣一杯大きくなるわ、お日様がよく当たる所に置いてやりましようよ」と大人がいう。

三月四月と子どもの身辺に起こった生活の変化が一応収まったように見えもするし思われもする五月、でも心のバランスがまだ充分でない子どもがいるのを大人は見のがしてはならない。子どもの日、遠足、運動会など行事が五月空の下、晴ればれと行われる五月に、心身のバランスにゆがみのある子どもがありはしないかと、一人一人への細かい心くばりがしんそ望まれもする五月である。

故幸田文先生が話された。こぼれ種から咲き出た菜の花の小さく、かぼそい茎の上の濃い黄色のけなげにも美しい色。えぞ松の自然林がなぜ一列にしか生育していないかをしらべに北海道へいかれ、倒れた(雪、風などで)親木の上に芽生えた数千の稚木が互いにしめぎ合いながら、猛々しく、懸命に、黙って苦しみ悲しみに耐えて横たわって死んでいる親木を養分にして育っていると、いうわけを知り、なお且つ切株の親木を大事に温かく囲んで立っている若木(といっても樹齢二百年をこえる)の姿に深く感動された、と。

二十一世紀を担う子ども達に私達大人が何をどうしたらいのか、何事も地球規模で考えるべきだといわれる今、そのことを教えられたように思い、胸が締めつけられるようで老いの眼はじ

わーっときたのだった。

先頃じゃが芋袋にどっかりと入った男女が「こらうしていると、芋のキモチがしみじみわかりますね」とほほ笑んでいるコマージュがあった。面白いなと思った。子ども達の中にいて、一しよに遊び、生活し、どっかりと住み暮らしてこそ子ども一人一人のきもちがしみじみわかるのだな、と又しても我田に水をひいてしまった。

「自然と一致するのは児童こどもの榮譽、児童こどもと一致するのは教師(おとな)の榮譽」との倉橋惣三先生がスタンレー・ホールのことばを度々言われたのを思う。

ジャガ芋の花が咲き始める五月である。

(音羽幼稚園)